様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(A)（海外学術調査）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｈ０２６１０

研究課題名（和文）エジプト、ルクソール西岸の新王国時代岩窟墓の形成と発展に関する調査研究

研究課題名（英文）Research on the Formation and Development of Rock-cut Tombs of the New Kingdom on the West Bank of Luxor, Egypt.

研究代表者
近藤　二郎（Kondo, Jiro）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：７０１８６８４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　31,000,000円

研究成果の概要（和文）：古代エジプト新王国時代の代表的な墓域が形成されたルクソール（古代のテーベ）西岸地域のアル＝コーカ地区において、発掘調査を実施した。
　調査地域は、厚い堆積砂礫に覆われ、これまで十分な研究がおこなわれていなかった場所であった。発掘調査の結果、今まで知られていなかった複数の未知の岩窟墓を発見するなど、新王国第18王朝前半から第20王朝時代にかけての約400年間に、この地区でどのように岩窟墓が造営され、利用されてきたかを明らかにできた。
　またアメンヘテプ３世治世末期の高官ウセルハト墓(TT47)を再発見できたことでアマルナ時代直前の大型岩窟墓の変遷にとって新たな知見を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
新王国第18王朝アメンヘテプ４世（後のアクエンアテン）によって断行された「アマルナの宗教改革」に関して、その直前のアメンヘテプ３世治世末期における岩窟墓の構造・規模、そして位置の変化などを明らかにすることで、「アマルナ時代」の背景にある新資料を提示したことは重要な学術的意義といえる。
　またエジプト・アラブ共和国において、日本の調査隊が継続的に大規模な考古学的調査を実施し、新たな調査成果や保存修復活動などをおこなっていることは、エジプトだけではなく日本においても社会的意義が大きいものである。

研究成果の概要（英文）：Excavation and research were conducted in Al-Khokha district on the West Bank of Luxor (Ancient Thebes) where one of the representative tomb areas of the New Kingdom was formed and developed in ancient Egypt.
　The research area had been covered with thick layers of sand and debris, and therefore, thorough research had not been done before we started excavating the area. As a result of the excavation, we discovered a number of unknown rock-cut tombs that had been built during 400 years from the beginning of the New Kingdom to the 20th Dynasty. The research showed the process of building the tombs and how they were used in the area. With the discovery of the tomb of the high official Userhat (TT47) who had lived at the end of the reign of Amenhotep III, we were able to gain the insight into the change in the style and building process of large rock-cut tombs right before the entry into the Amarna period.

研究分野：エジプト学

キーワード：エジプト　ネクロポリス・テーベ　アマルナ時代　アメンヘテプ３世　大型岩窟墓　レリーフ墓　再利用墓

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) エジプト・アラブ共和国、ルクソール市の世界遺産「古代都市テーベとその墓地遺跡」は、古代エジプト最大のカルナク神殿や歴代の王の墓所である王家の谷など、重要な考古学的遺跡が集中する地域であり、この地域の調査研究は、古くからエジプト学の中心的課題となっていた。

(2) 研究代表者は、約40年間にわたり同地域の調査研究を実施しており、2007年からは科学研究費の助成を受け、エジプト、ルクソール西岸アル=コーカ地区で発掘調査を開始・継続してきた。これまでの発掘調査では、特に同地区の形成期（新王国時代第18王朝）の岩窟墓を対象とし、墓地の形成過程について調査を実施した。その結果、所在不明となっていたウセルハトの墓を再発見するなど、形成期の様子を明らかにした。さらに、2013年12月には、壁画が残る未知の岩窟墓（コンスウエムヘブの墓）が発見され、周辺部の発掘調査がエジプト考古省から要請されていた。

２．研究の目的

(1)ルクソール西岸アル＝コーカ地区において、「アマルナ時代」直前の第18王朝アメンヘテプ３世治世末期に出現するレリーフ装飾をともなう大型岩窟墓が、それ以前の新王国第18王朝時代の岩窟墓が存在していた中で、どのように形成されていったのかを解明する。

(2)アル＝コーカ地区で新たに発見されたラメセス朝（第19・20王朝）時代のコンスウエムヘブの墓（KHT02）とコンスウエムヘブの息子であるアシャケトが付近の第18王朝アメンヘテプ２世治世の岩窟墓(TT 174)を自らの墓として再利用していることから、コンスウエムヘブの家族が、形成期の岩窟墓とどのような関係にあったのか等、新王国時代における墓地の形成から発展までのモデルを示すこと。

３．研究の方法

(1)研究目的を遂行するため、アル＝コーカ地区の中心に位置する大型岩窟墓のウセルハト墓(TT 47)とその周辺部の発掘調査を継続することで、ウセルハト墓(TT 47)の正確な構造とプランとの把握につとめこの大型岩窟墓が、この場所に造営されたのかを明らかにする。さらに、ウセルハト墓の前庭部および周辺部の発掘調査により、アマルナ時代以降の墓地の利用の痕跡を明らかにする。

(2)コンスウエムヘブ墓(KHT02)および、コンスウエムヘブ墓周辺の発掘調査を実施し、新たな岩窟墓の発見を目指す。発掘調査の過程で出土した資料から、この地区の岩窟墓の編年を構築し、発展過程について明らかにする。アル＝コーカ地区における岩窟墓の形成・利用、そして再利用などの一連の過程をひとつのモデルとして提示する。

４．研究成果

(1)アメンヘテプ３世治世末期の高官ウセルハトの岩窟墓(TT 47)は、アマルナ時代直前のレリーフ装飾を施した大型岩窟墓であるにもかかわらず、約100年にわたり行方不明の状態にあったため、極めて重要な岩窟墓であるにもかかわらず、これまでほとんど学術的な研究がおこなわれてこなかった。このウセルハト墓(TT 47)を2008年12月に再発見し、その後、岩窟墓を覆う厚い堆積砂礫の除去作業を継続することで、それまで不完全な形で報告されていたウセルハト墓(TT 47)の構造を明らかにし、正確な平面プランを明らかにすることができ、アメンヘテプ３世治世末期の大型岩窟墓研究に重要な基礎的資料を提示することになった。さらに、ウセルハト墓(TT 47)の入口上部に施されたレリーフ装飾を発見することができ、太陽神のアトゥム神とラー・ホルアクティ神を礼拝するウセルハトの図像は、アメンヘテプ４世（後のアクエンアテン王）時代のケルエフ墓(TT 192)のものと酷似しており、ウセルハト墓がケルエフ墓の直前の時期に造営したことが明らかとなった。

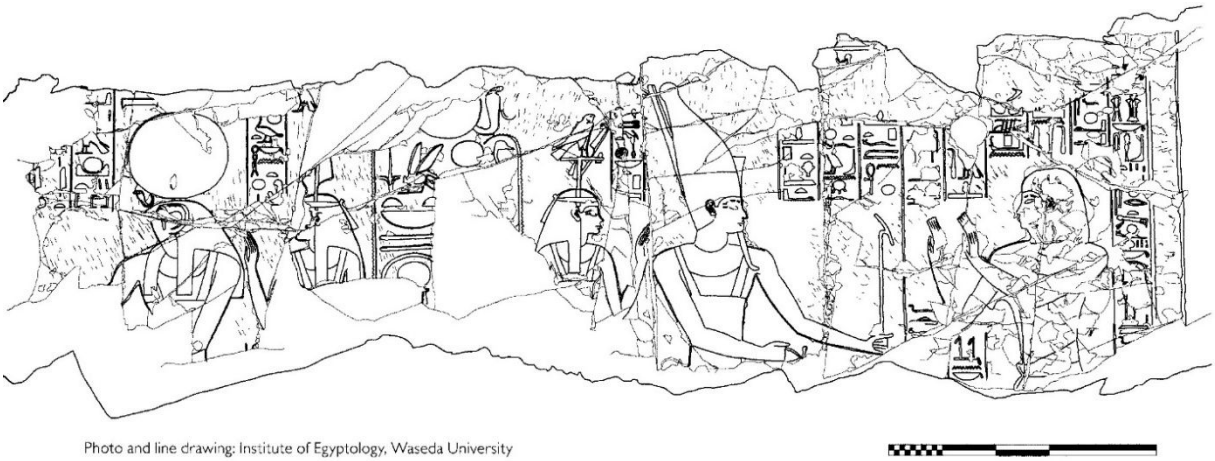

図１　ウセルハト墓(TT 47)入口上部のレリーフ装飾

(2)アル＝コーカ地区においてウセルハト墓(TT 47)の北側に位置する岩窟墓群のクリーニングおよび岩窟墓の位置関係・構造を把握するために、正確な平面プランを得るための測量調査を実施した。これらの墓の測量調査すら実施されておらず、従来は不完全なスケッチプランがあるのみであった。測量調査の結果東側からTT 174、TT-62-、TT 264、TT-330-の４基の岩窟墓である。岩窟墓内部の観察から、これらの墓の時期としては、第18王朝前期のハトシェプスト女王時代と思われるTT-62-、同じく第18王朝中期のアメンヘテプ２世時代のTT 174が造営された。その後、壁面装飾が残存していないため第18王朝の詳細な時期は不明であるが、TT-330-が造営された。このTT-330-とTT-62-の間にTT 264が、その空間ギリギリに位置している。TT 264は、壁面のレリーフや碑文から第19王朝ラメセス２世時代のものであるが、第18王朝時代の岩窟墓に挟まれた空間に、新たに第19王朝時代に新たに岩窟墓を掘削したと考えることは困難であり、TT 264は、第18王朝時代に造られた岩窟墓を第19王朝で再利用したと推定できる。測量調査の結果、限られた空間を有効に使用するために、見事なまでに隣接して岩窟墓が建造されていったことがよく理解できる平面プランとなっている。

(3)2013年12月に新発見したコンスウエムヘブ墓(KHT02)は、内部の壁面や天井部の壁画が良好に保存されていたが、その保存・修復作業を早急に実施する必要があり、８mほどの厚さの堆積砂礫を除去し、元来のコンスウエムヘブ墓の前庭部と入口を検出した。コンスウエムヘブ墓の前庭部は南北に長い矩形を呈しており、前庭部の南側に第18王朝（おそらくトトメス４世時代）の岩窟墓の入口の存在が想定された。元来の墓の入口を発掘したことで墓内部の壁面・天井部の保存・修復作業を本格的に実施でき、内部の発掘作業も実施できた。また、ウセルハト墓(TT 47)の前庭部・北東部で2017年1月に新王国ラメセス朝（第19・20王朝）時代の「王の書記」のコンスウの墓(KHT03)を新発見した。この岩窟墓は未知のものであり、コンスウエムヘブ墓(KHT02)と同時期であるが、第18王朝アメンヘテプ３世治世末期に造営されたウセルハト墓(TT 47)の前庭部北東コーナーで、この墓(KHT03)を避けて前庭部が構築されていることから、新発見された墓(KHT03)は、既に第18王朝アメンヘテプ３世治世には存在していたことを示していることは、アル＝コーカ地区の岩窟墓の形成と発展を考え上で重要な発見であった。第18王朝時代に造営された小岩窟墓は、その後、ラメセス朝時代に再利用されていたことが判明している。同じように、コンスウエムヘブ墓(KHT02)の天井装飾には、第18王朝のトトメス４世・アメンヘテプ３世治世に多く描かれたパターンが施されていることから、コンスウエムヘブ墓も第18王朝後期の岩窟墓を再利用された可能性があることが指摘された。

(4)アル＝コーカ地区の発掘調査地は、涸谷（ワーディ）状になっているため周辺地域から数多くの遺物が流入した場所であり、中でも新王国時代の葬送用コーンは、これまでの発掘調査で269個の銘文が読解可能なものが出土している。これらの銘文を分析したところ、51種類の葬送用コーンが存在することが判明した。出土コーンの大部分は、5点以下の点数であったが、ウセルハト墓(TT 47)に属するウセルハトのコーン(D.& M.#406)が127点と圧倒的に多かった。調査地域にある岩窟墓と関連する葬送用コーンとしては、TT-62-の被葬者であるエスのコーン(D.& M.#31)が11点含まれている。これ以外の葬送用コーンで出土点数の多いものとしては、パヘカエムサセンという名の２種類の葬送用コーン、D.& M.#267とD.& M.#324があり、前者は44点、後者は26点出土している。このことから、発掘調査地およびその周辺地域にパヘカエムサセンの岩窟墓が存在する可能性が高い。そして、ヘミィという名の葬送用コーン(619/A08)が28点出土しており、このヘミィの墓も発掘調査地およびその周辺地域に存在している可能性がある。また、発掘調査で10点出土した葬送用コーンが、ネブアメンのコーン(D.& M.#553)であり、彼の岩窟墓も調査地域付近に存在すると推定できよう。出土した葬送用コーンを分析することで未だに確定されていない岩窟墓をリスト・アップすることで、アル＝コーカ地区の岩窟墓の形成と発展の様相をより詳細に記述できるようになる。新王国時代のアル＝コーカ地区における岩窟墓の形成・発展。再利用の様相を明らかにすることができた。今後、詳細に出土遺物や遺構を検討すること、あるいは墓の存在が推定されている場所を精査することにより、この地区における岩窟墓の展開についての詳細が明らかになる。

(5)アル＝コーカ地区での継続した発掘調査により、アマルナ直前の大型岩窟墓であるウセルハト墓(TT47)およびその周辺の岩窟墓群の分布と正確な平面プラン・墓の配置などを明らかにできた（図２）。図２には８基の岩窟墓の情報が含まれるが、コンスウ墓(KHT03)の地下でさらに数基の岩窟墓の存在、コンスウエムヘブ墓の南側に１基、ウセルハト墓(TT47)の南側にさらに１基など、狭い範囲内に15基前後の岩窟墓の分布が確認され、岩窟墓の形成・発展に関して貴重な地域であることが判明しており、岩窟墓研究にとって重要な資料が提示できた。

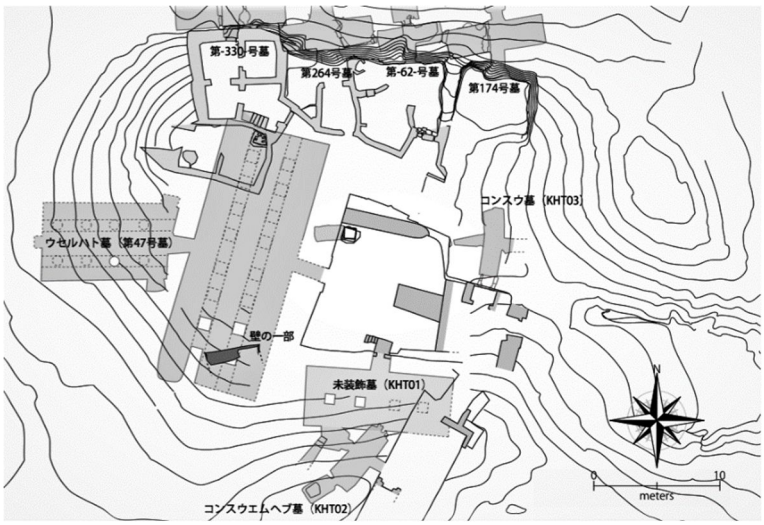

図2　ウセルハト墓及びその周辺の岩窟墓群平面図

参考文献：KONDO,Jiro and Nozomu KAWAI “Discovered, lost, rediscovered: Userhat and Khonsuemheb”, *Egyptian Archaeology* 50, Spring 2017, Egypt Exploration Society, London, pp.22-26.

(6) アル＝コーカ地区における岩窟墓の形成・利用・そして再利用

アル＝コーカ地区では、ネクロポリス・テーベにおける古王国第６王朝時代の岩窟墓が造営を開始した。アル＝コーカ地区は岩盤の質が悪いにもかかわらず、テーベ東岸との位置関係から古王国時代の岩窟墓が存在しているとみられる。この地区は、西岸で重要な場所であるアル＝ディール・アル＝バハリに近く、耕地から墓域までの距離も近いことも最初に利用されたものと思われる。中王国時代になると第11王朝のメンチュヘテプ２世墓所の置かれたアル＝ディール・アル＝バハリの周囲に岩窟墓が造営された。第18王朝時代になるとアル＝コーカ地区は、北のアル＝ディール・アル＝バハリやアサシーフ地区と南のシェイク・アブド・アル＝クルナ地区との間に位置することから多くの岩窟墓が、幾つかの標高ごとに列となって造営されている。アル＝コーカ地区の調査地区でも、ウセルハト墓(TT 47)の先ず北側に第18王朝時代前期のハトシェプスト女王治世頃から北側斜面に穿たれた岩窟墓が造営され始め、その後、隙間の無いようにほぼ同じ高度に造営された。このラインに位置する墓が、TT 174、TT-62-、TT 264、TT-330-と横並びの岩窟墓群である。また発掘調査で発見されたラメセス朝時代（第19・20王朝）の小岩窟墓であるコンスウエムヘブ墓(KHT02)とコンスウ墓(KHT03)の２基の墓は北側のラインよりも一段低い高度に造営された元来は第18王朝時代のアメンヘテプ３世治世までに掘削された岩窟墓とみられ、小型ながらも鮮やかな壁画の施された岩窟墓と推定できる。また時期もおそらく、第18王朝トトメス４世治世～アメンヘテプ３世治世の岩窟墓であろう。このコンスウエムヘブ墓の南側にある岩窟墓は、調査地域の南西に位置するジェセルカーラーセネブ墓（TT 38）からメンナ墓(TT 69)まで一列にライン上に並ぶトトメス４世治世の岩窟墓群があり、おそらく２基のこの時期の岩窟墓が調査地区に存在していることが想定される。

第18王朝アメンヘテプ３世治世30年以降に、北のメンフィスなどの影響から大型で前室に多数の柱を持つ岩窟墓が出現する。これらの大型岩窟墓は、伝統的な壁画で装飾される典型的なテーベの岩窟墓とは異なるレリーフ装飾が施された岩窟墓であった。こうしたレリーフ装飾は、メンフィスの石灰岩の切石を積んで表面にレリーフ装飾を施すメンフィスの伝統的な装飾を踏襲している。シェイク・アブド・アル＝クルナ地区に造営されたアメンヘテプ３世～アメンヘテプ４世治世の宰相でテーベ市長であったラモーゼ墓(TT 55)やアル＝コーカ地区のアメンエムハト・スレル墓(TT 48)、そしてアサシーフ地区のケルエフ墓(TT 192)などの石灰岩の壁面に施された聖地なレリーフが名高い。アル＝コーカ地区の我々が調査しているウセルハト墓(TT 47)も同じ時期に造営したものであり、壁画ではなくレリーフ装飾を施すために岩盤の表面にレリーフ装飾が可能な標高86～90mに分布するクルナ石灰岩層が選択されたものと思われる。そのため、第18王朝中期のトトメス３世～アメンヘテプ２世治世に標高の高い場所に身分の高い人物の岩窟墓が造営された時期と異なり、アメンヘテプ３世治世30年以降には、低い位置に大型岩窟墓が身分の高い人物のために建造されたのであった。アメンヘテプ３世治世末期に突如出現した大型岩窟墓は、多くの柱を持っていたにも関わらず、クルナ石灰岩の強度が天井を支えられないほど低かったために、ほとんど全ての大型岩窟墓の天井は崩落してしまっている。アマルナ時代が終わると再び人びとはアマルナからテーベやメンフィスに移動した。テーベでは第19王朝になると、第18王朝のトトメス４世・アメンヘテプ３世治世の岩窟墓の再利用がおこなわれている。ラメセス朝時代にこうした第18王朝の岩窟墓の再利用がおこなわれた。その後、第３中間期になると、既存の岩窟墓を利用してミイラとした遺体の埋葬がおこなわれたが、墓の内部装飾を改変することはなかった。末期王朝やプトレマイオス朝時代においては、既存の岩窟墓の前庭部やシャフトなどを利用しミイラの共同埋葬などがおこなわれている。カノポス容器、シャブティ像、護符、土器などの副葬品が多量に出土している。

(7) アル＝コーカ地区の岩窟墓の形成（図３）

アル＝コーカ地区の岩窟墓群が、ほぼ同じ標高の岩肌に並んで穿たれたもので、隙間なく構築されていることは、測量調査で得られた岩窟墓の平面図（図３）で確認することができる。

測量器材を使用して描いた図からは、それぞれの岩窟墓が見事なまでに精密に岩を掘削して造営されていることが判明している。図３の右から２番目の奥室に２本の柱を持つTT-62-が、第18王朝前期のもので、これら４つの中では、最初に造営され、次にTT 174とTT 264がTT-62-に隣接して掘削されたと考えられる。TT 264は第19王朝時代の墓として登録されているが、墓は第18王朝時代に造営されたものを第19王朝に再利用されたものである。TT 264の奥室の奥から下降通路が伸びて奥にさらに部屋が付加されているが、時期的には新王国時代以降のものである可能性が高い。またTT-62-とTT-330-の間に空間があって、その空間を第19王朝時代に墓を新規に造営したとは考えにくい。こうした図が墓の形成・発展を考える上でかかせない。

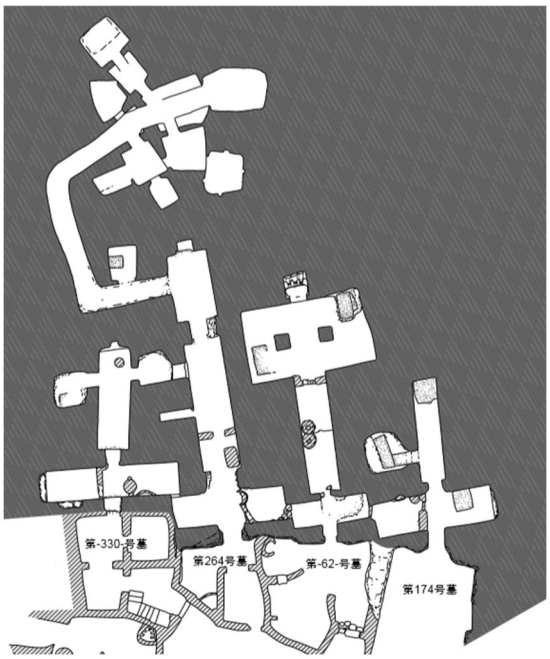

図３　アル＝コーカ地区新王国岩窟墓群

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合望・高橋寿光・福田莉紗	４．巻 26
２．論文標題 第１２次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	５．発行年 2020年
３．雑誌名 エジプト学研究	６．最初と最後の頁 74-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤二郎	４．巻 -
２．論文標題 アメンヘテプ４世のテーベの王墓	５．発行年 2020年
３．雑誌名 オシリスへの贈物：エジプト考古学の最前線	６．最初と最後の頁 53-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤二郎	４．巻 49
２．論文標題 エジプト古都テーベの発掘	５．発行年 2019年
３．雑誌名 史学論集	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合望・高橋寿光・米山由夏	４．巻 25
２．論文標題 第１１次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	５．発行年 2019年
３．雑誌名 エジプト学研究	６．最初と最後の頁 25-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤二郎	４．巻 1
２．論文標題 ネクロポリス・テーベ研究の地平	５．発行年 2018年
３．雑誌名 発見！古代エジプト７つのひみつと最新エジプト研究	６．最初と最後の頁 64-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤二郎	４．巻 26
２．論文標題 ネクロポリス・テーベ研究：ルクソール西岸アル＝コーカ地区第11次調査	５．発行年 2019年
３．雑誌名 第26回西アジア発掘調査報告会報告集	６．最初と最後の頁 100-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤二郎	４．巻 141
２．論文標題 ネクロポリス・テーベの考古学の現状と課題	５．発行年 2017年
３．雑誌名 季刊　考古学	６．最初と最後の頁 79-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤二郎・吉村作治・菊池敬夫・柏木裕之・河合望・高橋寿光	４．巻 24
２．論文標題 第10次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	５．発行年 2018年
３．雑誌名 エジプト学研究	６．最初と最後の頁 11-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Jiro Kondo and Nozomu Kawai	4．巻 50
2．論文標題 Discovered, lost, rediscovered: Userhat and Khonsuemheb	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Egyptian Archaeology	6．最初と最後の頁 22-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 近藤二郎	4．巻 4号
2．論文標題 ブリュッセル、王立美術歴史博物館所蔵の王妃ティイのレリーフ（E.2157）	5．発行年 2016年
3．雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6．最初と最後の頁 7-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://www.waseda.jp/flas/rilas/assets/uploads/2016/10/Rilas04_007-015_Jiro-KONDO.pdf	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 馬場匡浩・近藤二郎・河合望	4．巻 1号
2．論文標題 3D活用の可能性―エジプトの場合―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 3D考古学の挑戦:考古遺物・遺構の三次元計測における研究の現状と課題	6．最初と最後の頁 70-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 近藤二郎・河合望・平原信崇	4．巻 第18号
2．論文標題 富岡重徳コレクションの古代エジプト資料	5．発行年 2017年
3．雑誌名 會津八一記念博物館研究紀要	6．最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合望・高橋寿光・福田莉紗	４．巻 23号
２．論文標題 第9次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	５．発行年 2017年
３．雑誌名 エジプト学研究	６．最初と最後の頁 43-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES23/3	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 近藤二郎	４．巻 174冊
２．論文標題 テーベ西岸の岩窟墓におけるアマルナ時代直前の変化	５．発行年 2016年
３．雑誌名 史観	６．最初と最後の頁 81-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合望・高橋寿光、竹野内恵太、福田莉紗	４．巻 22号
２．論文標題 第８次ルクソール西岸アルコーカ地区調査概報	５．発行年 2016年
３．雑誌名 エジプト学研究	６．最初と最後の頁 33-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤二郎・河合　望	４．巻 23
２．論文標題 ウセルハト墓の調査	５．発行年 2016年
３．雑誌名 平成２７年度考古学が語る古代オリエント	６．最初と最後の頁 98-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 近藤二郎
2．発表標題 エジプトにおける文字記録の抹殺とアレクサンドリア大図書館の焼失
3．学会等名 文化遺産国際協力コンソーシアム（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 KONDO, Jiro
2．発表標題 The Tomb of Userhat(TT 47) and the Large Rock-cut Tombs in Thebes under the Reigns of Amenhotep III and Amenhotep IV.
3．学会等名 International Symposium Thebes under Amenhotep III
4．発表年 2019年

1．発表者名 近藤二郎
2．発表標題 エジプト・古都テーベの発掘
3．学会等名 第46回駒澤大学大学院史学会大会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 近藤二郎・河合望・柏木裕之・高橋寿光
2．発表標題 エジプト、ルクソール西岸新王国時代岩窟墓の調査研究
3．学会等名 日本オリエント学会第60回大会、京都大学
4．発表年 2018年

１．発表者名 近藤二郎
２．発表標題 ネクロポリス・テーベ研究：ルクソール西岸アル＝コーカ地区第11次調査
３．学会等名 第26回西アジア発掘調査報告会
４．発表年 2019年

１．発表者名 KONDO, Jiro
２．発表標題 The Tomb of Amenhotep III (KV 22) and KV A in the Western Valley of the Kings
３．学会等名 Valley of the Kings: 200 years of discoveries, research, and preservation（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 近藤二郎
２．発表標題 ネクロポリス・テーベ研究の地平―エジプト・ルクソール岩窟墓プロジェクト
３．学会等名 早稲田大学考古学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 近藤二郎
２．発表標題 ルクソール西岸、アル＝コーカ地区出土の葬送用コーンについて
３．学会等名 一般社団法人　日本オリエント学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 近藤二郎
２．発表標題 アル＝コーカ出土の葬送用コーン―エジプト、アル＝コーカ地区第10次調査
３．学会等名 日本西アジア考古学会、第26回西アジア発掘調査報告会
４．発表年 2018年

１．発表者名 近藤二郎・河合望・福田莉紗
２．発表標題 エジプト、ルクソール西岸のアル＝コーカ地区から出土した葬送用コーン
３．学会等名 日本オリエント学会　第58回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 近藤二郎
２．発表標題 ネクロポリス・テーベ、アル＝コーカ地区の岩窟墓調査
３．学会等名 日本西アジア考古学会　第24回西アジア発掘調査報告会
４．発表年 2017年

１．発表者名 近藤二郎
２．発表標題 ウセルハト墓の調査
３．学会等名 西アジア考古学会、
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 近藤二郎（月本昭男編）	４．発行年 2017年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 308(のうち33頁を分担)
３．書名 宗教の誕生（第２章エジプトの宗教を分担執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	前川　佳文 (Maekawa Yoshifumi) (80650837)	独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・研究員 (82620)	
研究分担者	馬場　悠男 (Baba Hisao) (90049221)	独立行政法人国立科学博物館・その他部局等・名誉研究員 (82617)	
研究分担者	中井　泉 (Nakai Izumi) (90155648)	東京理科大学・理学部第一部応用化学科・教授 (32660)	